

Zephyr

〈第47号〉

ゼフィール・にしかぜ


<http://www.kilc.konan-u.ac.jp>

《特集*異文化発見!～知っておくと海外での生活に役立つ習慣の違い》

☆所長からのメッセージ 外国語学習は異文化理解の始まり	胡 金定	1
〔英語〕 The Space Around You	Thomas MACH	2
〔ドイツ語〕 異文化発見～知っておくと海外での生活に役立つ習慣の違い		
～ドイツ編：自分の当たり前は相手の当たり前でないかも・・・	藤原三枝子	4
〔フランス語〕 フランス滞在中に注意すべきこと	ディディエ・シッシュ	5
〔中国語〕 北京の暮らしの中で	石井 康一	6
〔韓国語〕 日常生活にみる韓国人の礼儀作法―食事作法を中心に―	金 泰虎	7
〔日本語〕 異文化に魅せられて	富阪 容子	9
〔外国語科目・日本語科目優秀制度のお知らせ〕		12
『学習指導室を利用しませんか?』		12
『みんな集まれ!外国語で話してみよう』		12

外国語学習は異文化理解の始まり

国際言語文化センター所長 胡 金定

外国語学習は、日常生活の中で外国人と接したり、旅行や留学、仕事などで外国を訪問したりすることからすでに始まっている。つまり異文化に接し理解していくことが外国語学習のスタート地点なのである。

筆者にとって日本語は外国語であり、学習を始めたときから日本固有の文化への理解が必要であった。日本に留学して間もない頃、ラーメン店で早速異文化を体験した。ラーメンは昔中国人が開発した食品であるが、中国と日本では大きく違うことを知った。中国人は麺の固さや太さ、具を重んじ、店先では麺職人が麺作りを披露していることが多く打ち立てを茹で上げる。一方日本人は、具は焼き豚や葱、メンマなど定番のものが多く麺も自家製のものが少ないが、スープ(汁)には大変こだわりを持っている。また、お客さんのマナーにも驚いた。中国では「汁物を食べる時は音を立ててはいけない」という決まりがあり行儀が悪いとされているが、周りの日本人は「ズルズル」と音を立てながら食べていたのだ。私はこの光景を見て心底びっくりした。後で知ったが、「ズルズル」とすることによって麺の熱を冷ます効果があるからわざと音を立てるそうだ。確かに合理的である。「郷に入ったら郷に従え」と思って、以来行儀が悪いと思いつつも私も日本では「ズルズル」させながら食べるようになった。これは私の異文化理解の最初の出来事である。

最近、日本を訪れる中国人観光客が増えている。大半の中国人はお寿司を食べることを楽しみにしているが、さらにもう一品人気のメニューがある。それはラーメンである。だが、彼らもきつと日本人の「ズルズル」に驚くに違いない。日本には麺類を食べる時に音を立てながら食べる風習があり、決して行儀が悪いわけではないということを伝えていきたいと思う。これが異文化理解の実践である。

1980年代から国際化、グローバル化が進み、バブル経済に後押しされて海外に進出する日本企業が急増している。必然的に、外国語コミュニケーション能力(会話力)も求められるようになった。企業は諸外国で経済活動をスムーズに推進するために、外国語の堪能な人材を採用するようになり、日本

の大学外国語教育も変化を余儀なくされた。学生の外国語能力や異文化理解能力の育成の重要性が認識され、さらに異文化理解教育の取り組みにも力を入れるようになる。外国語学習という手段を通して異文化を体験していくことで、世界には多様な文化があり日本という自文化はほんの一部にすぎないということに気がつく。様々な価値観や思想、生活習慣、風習に接し、お互いに尊重しあうことの重要性に目覚めるであろう。そして、異文化理解によって差異に対する優しい心が生まれ、差別や偏見なしに共生できる社会が実現する。

外国語学習は単なる外国語の勉強ではない。異文化理解なくしては成り立たないのである。学生諸君には、外国語を学習していく過程でその言語の背景にある異文化を少なくとも一つは発見してほしい。その発見が相互理解に、また外国語習得に大きく寄与するに違いない。

The Space Around You

国際言語文化センター准教授 Thomas MACH

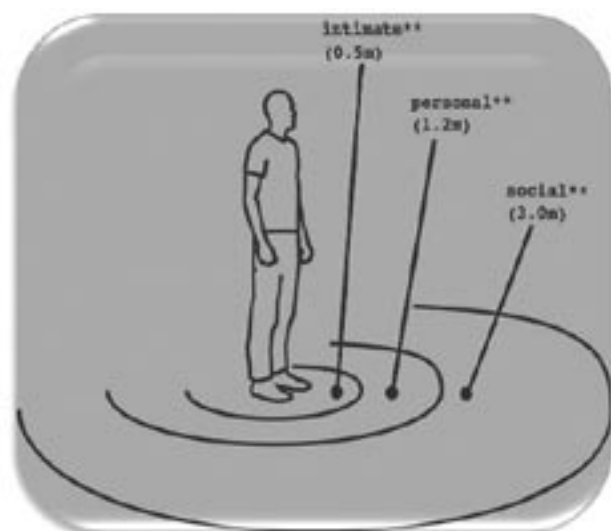
About 15 years ago in America, I taught my first English course. One of the students in that class was Toshi from Miyagi. He was the first Japanese friend that I ever had. He said to me, "Everything is so big in America!" We agreed that things like cars, roads, rooms, and houses -- even people! -- tend to be bigger. Then Toshi said, "But it's not just those things. In America, even the moon looks bigger!"

Toshi's comment about the moon shows how deeply our cultural surroundings can affect how we see the world. So, studying not only language but also customs is necessary if you want to understand how people in another culture experience their daily lives. And, if you really want to understand their viewpoints deeply, you need to consider the cultural roots of their customs.

So, let's look closely at the bigness that Toshi mentioned. America is a big country that is not so crowded. The first immigrants to America found a lot of space and a lot of resources. They didn't feel the same limits that we feel on these smaller, crowded islands called Japan. So, they planned on a big scale. And they built on a big scale. When everything is big, "big" feels "normal." And it has an effect on how people treat each other.

Because of the big scale of everything, Americans are used to having lots of space around them. We can divide this space into three levels: intimate space, personal space, and social space. The size of these levels is different in each culture, and the study of how such space affects us is called *proxemics*.

If someone enters your personal space, it's difficult to ignore. So, for example, if a stranger sits next to you on a bus in America, he may try to greet you, or



**Proxemic space for typical Americans

maybe smile, or at least make eye contact. Not doing so feels strange or even rude, because that person feels like he is entering your personal space.

Think about your train rides in Japan. Sometimes you sit or stand so close to strangers that your bodies are touching, but you don't feel like you need to greet those people or make eye contact. In most of America, it's impossible to ignore someone so close. It's only possible on, for example, a subway in New York City where the cultural rules of proxemics are similar to Japan because New York City is a crowded and busy place.

I think this explains much of the behavior that gives Americans a friendly reputation. They easily say "Hi" to a stranger who approaches them, or they might hold the door open for you if they hear your footsteps behind. Or they might have a short conversation with the worker who takes their money in a grocery store or restaurant. It's because they can't ignore people who enter their personal space.

If you ignore personal space, many little things can go wrong when you enter another culture. For example, Japanese drive on the left. But when walking or riding a bicycle, this "stay left" rule is not so strict because it's too difficult to follow. Imagine trying to stay left of everyone while walking through Sannomiya station. It's impossible! There are too many people coming from all directions. You will go crazy if you try to stay left of all of them! So, Japanese understand that they must be flexible about this personal space "rule" in such situations in their own culture.

Americans drive on the right, and their strong tendency is to stay right when they walk as well. They generally don't have experiences with places as crowded and busy as Sannomiya, and so staying right is not difficult. Walking with Japanese friends in America, I've sometimes noticed these friends are unaware of the trouble they are causing. For example, they might assume the "stay right" rule is not so strict, and they just walk. The American coming the other way tends to move right first, because the American is used to wider personal space and feels a need to avoid collision first. The Japanese person can happily walk through a shopping mall or airport and not even be aware that people around her are making efforts to avoid her. Sometimes, when the American isn't paying attention either, I've seen a Japanese friend actually bump into an American in an uncrowded place. It's a little embarrassing, but it's quite a funny thing to see!

So, when you travel to America, try to adjust your personal space. Make it a little wider. Don't ignore people when they are close to you. It's not easy to change something so basic! However, if you can do it, you will find yourself naturally following some invisible cultural rules. Strangers will then generally view you as a courteous and kind person, rather than a selfish or rude person who is ignoring their presence. And you will then learn that part of the charm of daily life in America is the small gestures of kindness you share with strangers, and the kindness you receive from them. In fact, you could get so used to it that, after you return to Japan, you might feel a little lonely when you get on a train and no one looks at you, smiles at you, or talks to you.

Toshi was wrong -- the moon is not bigger in America. But he was right about American bigness. And he loved his year in America and made many friends. I think this was because he was sensitive enough to be aware of his own cultural rules as a Japanese, and to adjust them enough in order to fit in while he stayed in America.

異文化発見～知っておくと海外での生活に役立つ習慣の違い ～ドイツ編：自分の当たり前は相手の当たり前ではないかも・・・～

国際言語文化センター教授 藤原 三枝子

ドイツに一定期間滞在すると、文化の違いに戸惑うことや誤解を受けることが少なくありません。また、旅行者として短期間滞在する場合でも、知っておいた方が気持ちよく過ごせることもたくさんあります。たとえば・・・

～Stille Wasser sind tief. 「静かな水は奥深い」：「静かな水」は良いの？悪いの？～

ドイツ語の諺に「静かな水は奥深い」というのがあります。さて、皆さんはどのように解釈しますか？「寡黙な人はべちゃくちゃお話しする人よりも奥が深い」と理解するか、「もの静かな人は腹の内を何を考えているのか分からないので要注意」と解釈するか、二通りあるようです。皆さんはどちらでしょうか？でしゃばることをあまり好まない日本の文化には前者の方が馴染むように思います。調査したわけではありませんが、ドイツ語圏では後者の理解の方が強いように感じます。ドイツ人のコミュニケーションでは、日本のようにその場や人間関係などのコンテクストに配慮して相手の発話意図を察するよりも、発せられる「ことば」そのものに意味を見る傾向があります。ドイツでは、ことばでメッセージを発するようにすることが大事です。まずは挨拶から始めましょう。ドイツではスーパーのレジや郵便局の窓口などでも、[Hallo!],[Guten Tag!](こんにちは！)[Auf Wiedersehen!](さようなら)、金曜日の夕方になると [Schönes Wochenende!](良い週末を！)と、売り手とお客さんがお互いに挨拶をしあいます。始めは恥ずかしかったり、めんどくさく感じたりするかもしれませんが、挨拶は、「あなたと良い関係を持ちたい」というメッセージです。是非、挨拶してみましょう。「物静か＝奥ゆかしい＝美德」ではない文化もあります。

～ドイツ文化は謝らない文化？～

日本人はどうも「すみません」を多用する傾向があるようです。先日、デパートのお惣菜売り場の売り手と客の対話を聞いていると、売り手が商品を渡すときにも「ありがとうございます」の意味で、「すみません」を使うのを聞きましたが、すこしおかしいですね・・・お客さんの方も思わず、「すみません」と返すこともあるようです。売り手の「すみません」は、「散財をおかけしてすみません」の意味なのでしょうか・・・客の「すみません」は、「お気を使わせてすみません」なのでしょうか・・・日本はどうも謝ることが好きな文化のようです。大企業などが不祥事を起こすと幹部が行儀よく頭を下げ、「世間をお騒がせしました」と謝る映像をテレビで何度も見ますが、この「世間を・・・」をドイツ語にするのはなかなか難しいのです。私がまだ20代後半のとき、当時神戸にあったドイツ総領事官に勤務した初日の仕事が、大麻所持で捕まった若いドイツ人船員さんの尋問の通訳でした。この時、取調官の「世間様に対して申し訳ないと思わないのか」という問いを、どのように訳したら良いのか困ったことを思い出します。「大麻で捕まってしまい、船は自分を置いたまま神戸を離れていくし、自分個人として馬鹿なことをしたとは思ってはいるが、世間に対して謝る必要を感じない・・・」というドイツ人の答えをそのまま訳したら、「改心の情がみられない」ということになってしまいます。ドイツ語では、何か不都合なことが起こった場合、それが自分の責任ではないと思う時と、責任を感じる場合とでは言い方を変えます。自分に責任があると感じる時は **Entschuldigen Sie bitte.**（「申し訳ありません」）ですが、自分に責任がないと感じる時には **Es tut mir Leid.**（（そのようなことが起きたことは）残念です。）日本語に訳すと、両方とも「ごめんなさい」になるのかもしれませんが、

安易に Entschuldigen Sie. と言ったために、後で責任を問われることもあるかもしれません。この使い分けを心がけると、日本語の曖昧さが見えてくることにもなります。

～ボディーバブルって？～

Mさんは、ドイツの本部から日本にあるドイツの外務省の外郭団体に派遣されて、日本滞在6ヶ月目のドイツ人男性です。あるとき、講演会で再会した彼はとても真剣に次のような質問をしてきました。「日本人と話するとき、とくに女性は、ずっと僕から距離をおくんだ。僕は、もしかしたら体臭が強いのかな・・・正直に言ってくれないか」。これはボディーバブル、つまり自分が心地よく感じる、相手との物理的距離の問題だと思われます。この距離は文化による差が大きく、日本人、とりわけ女性のボディーバブルは、他の多くの文化よりもかなり広めであることが知られています。この話をしても彼はなかなか納得しませんでした。皆さんがドイツに行かれたときには、日本でも心もち近づいてお話しすると、ドイツでは丁度よいのかもしれない。

～音に対する感覚の違い～

日本は音に溢れている、というのが日本に来て間もないドイツ人の感覚でしょう。先日学会で行ったJR西千葉駅では鳥の声がスピーカーでずっと流されていました。音に対して敏感なドイツ人との食事のときにマナーとして注意すべきこととしてよく知られているのが、スープをすすらない、ということでしょう。「ずるずる」という音をたてることは、しつけの悪さを象徴する行為です。音をたてずにスープをいただくためのこつは、スプーンの横からスープをすするのでなく、スプーンの先を口に持っていくと音をたてずにいただくことができます。ドイツ人のいやがる「ずるずる」という音に関してもうひとつ。寒くなると風邪をひく人が多くなります。鼻をすする音を教室でもよく聞きますが、これはドイツでは良くありません。鼻はきちんとかんでおきましょう。その一方で、ドイツ人は、鼻をかむ際に、とても勢いよくかみます。ハンカチで、あたかも「トランペットをふくかのように (trompeten)」に大きな音でかむので、これには私たちは驚かされます。音に対する感覚も文化によって大きな違いがあるようです。

海外での滞在でストレスを少なくするこつは、「自分の当たり前は相手の当たり前ではないかもしれない」、ということをつねに意識しておくことでしょう。私はドイツに行く時、飛行機がフランクフルトに着くと、意識的に日本モードからドイツモードに切り替えています。そして、ドイツから関西空港に戻ってくると、自然と日本モードに切り替わっているようです。

フランス滞在中に注意すべきこと

国際言語文化センター准教授 ディディエ・シッシュュ

外国語を学習する際、コミュニケーション力を高めることはとても大切ですが、会話のマナーに関して注意すべき点がいくつかあります。いずれも、知らないこと誤解を生んだり嘲笑の的になる恐れがあります。

例えばフランスでは、初対面の人が出会ったとき、まず握手から入ります。「Bonjour, Monsieur. (あるいはMadame, Mademoiselle)」と言いながら、相手の目を見て右手を差し出し、握手を交わすわけ。このとき、目をそらしたり、いいかげんな握り方をすると、あまり良い印象を与えません。

なぜなら、偽善的な印象を与えるからです。

次に、親しくなると、フランス人はお互いの家庭に招待し合います。招待されたときは、指定の時刻よりも15分ほど遅れて着くことが望ましく、手土産はワインやお花やチョコレート(一口サイズのもの)が喜ばれるでしょう。ただし、切花は、その家の女主人の仕事を増やすことになるので、花瓶にすぐに入れられる状態でもって行くか、アレンジメントされたものにしましょう。ちなみに、フランスの夕飯(dîner)は、始まりが夜の8時半ぐらいと遅く、9時以降ということも珍しくありません。したがって、夕飯が終わるのは、夜中過ぎることも珍しくありません。一度に複数の人を家に招くことが多いので、招待客同士は面識がないこともあります。そういう場合は、食前酒を飲みながら、自己紹介をします。タイミングとしては、握手しながら、「Bonsoir Monsieur.」と言った後に、「Jem'appelle []」と自分の名前を続けて言いましょう。フランス式に名前を発音する必要はなく、自分の名前と名字をはっきりと伝えましょう。難しい名前は最初から愛称を告げてかまいません。自分が呼ばれたいように相手に伝えればよいのです。

さて、文法では二人称のvous とtuを習いますが、どちらを使えばよいのか分からず、話しかけてくても話しかけられない、という場合がよくあるようです。原則としては、目上の人にはvous、若い人同士または年下の人には、初対面でもtuが使えます。親しくなれば、誰とでもtuでかまいません。または、相手がtuを使い始めたらtuで答えてよいでしょう。心配なときは「On se dit tu ?」と確認すれば、失礼になる心配がありません。それから、外国人が犯しやすい失礼な言葉使いとして注意してほしいのが、三人称、つまり、「彼は」「彼女は」という主語の使い方です。「彼女が言うことには… / Elle dit que…」とか、「彼が…した / Il a fait…」のように、本人の前で三人称を使うのは大変失礼なことです。そういう場合は、主語には必ず本人の名前を使ってください。このように文法上は問題がなくても、会話上の習慣を知らないと、相手に不愉快な思いをさせてしまいます。

実際に会話が始めると、日本人は、ともすれば、黙って聞いているばかりになりがちです。フランス人のようにフランス語を話せないのは当然ですが、黙り込むのは失礼であり、会話の内容に無関心だと誤解されてしまいます。フランスでは、沈黙は「金」には値せず、《発言しない人は、頭が空っぽ》だとみなされてしまうのです。最悪の場合は、《沈黙＝相手を見下した敵意》だととられてしまうことさえあります。「さっきの表現は分かりませんでした。どういう意味ですか?」「質問の意味が分かりません。」と素直に相手に伝えればよいのです。分からないことを分かったふりをして聞いていると、泥沼に嵌ってしまいます。フランスでは、恥ずかしいと思って黙ってしまうのが一番良くないことなのです。

話すテーマについてですが、それぞれの文化によって、タブーは異なります。例えば、日本では、子供の通う学校や親の勤める会社の名前を聞かないほうが良いようですが、フランスではそんなことはありません。逆に、相手の年齢や宗教のことを聞かないほうが良いでしょう。それから、男性が女性のことを「あの人はきれいだ」とか「奥さんはきれいですね」というような発言は、知性のない人だと思われるのでやめましょう。フランス人は政治好きで、政治がよく話題になります。政治家の名前や時事的なトピックスには日ごろから注意し、反応できるようにしたいものです。もちろん、日本の政治動向や現代史(20世紀初頭から第2次世界大戦前後)についてある程度は知っておくべきでしょう。外国語をいくら習っても、頭にないことは発言できない、ということは言うまでもありません。フランスにおける「会話の伝統」は17世紀に遡り、サロンという空間で、いわゆる教養人たちによって育まれてきました。日本には、「以心伝心」という言葉で示されるように、集団の中で言葉を介せずに意向が通じる文化があり、これに慣れている日本人は、話術を身に付けることは容易ではなく、煩わしく思うこともあるかもしれませんが、話題を見つける努力をしながら、「日本人である」ということを一つの個性とし、自分を偽らず、背伸びをせず、まず相手に心を開くことが一番大事だとされます。

北京の暮らしの中で

国際言語文化センター准教授 石井 康 一

○北京の秋のさわやかさを表すのに「秋高气爽qiū gāo qì shuāng」ということばがあります。今年の秋は濃い霧に包まれた薄暗い日も多かったのですが、10月末から11月にかけて、雲一つない抜けるような青空が2週間続きました。そして11月7日は立冬、北京の厳しい冬が始まります。交換留学で北京郵電大学へ留学中の寺元多可志君（理工学部4年生）は、冬のウインドブレーカーを買いに衣料品市場へ行きました。値札がついていない店では店員との交渉で値段が決まります。最初店員が提示した価格は350元（約4500円）でした。「180元なら買いますけど」「そんな値段では売れません」「じゃあ結構です」店を去ろうとすると呼び止められて「お客さん、その値段で売らしましょう」同行の中国人の友人の口添えで更に20元値引きさせて、半額以下の160元（2000円）で買いました。寺元君は「同じ買い物でも日本との違いは大きいですね。店員の言うことを鵜呑みにせず自分の目で判断すること、自分で価値を決めることが必要です」と語ってくれました。

○地下鉄で感心するのは、小さい子供を連れのお母さんに若い男性（もちろん女性も）がすぐに席を譲ってくれることです。北京オリンピックを機に路線も増え、2元（25円）の統一料金でどこでも行ける地下鉄は、通勤通学時間帯以外も混雑がひどく、小さい子供にとっては苛酷な環境です。日本ではどちらかというと座席を譲る行動に一番踏み切りにくい若い男性が真っ先に席を譲ってくれる。お年寄りに対しても同様です。社会全体で弱者を温かく包む雰囲気を感じました。

○タクシーは自分で前の座席に乗り込む人が多いです。景色がよく見えますし、運転手と話がしやすいという感覚があるようです。レシートを自動発券する機械が搭載されており、乗車・降車時間、走行距離、料金、車両番号等が印字されるので、万が一忘れ物をしてもしすぐに連絡することができ便利です。降車時には必ず「给我发票！」（レシートを下さい！）といきましょう。初乗り3キロまで10元（130円）、以後1キロ毎に2元加算。私の手元のレシートを見てみましょう。

①走行時間40分 走行距離18,6キロ 料金52元（630円）40分乗って、ちょうど日本のタクシーの基本料金と同じくらいです。

②走行時間44分 走行距離7,7キロ 料金33元（400円）経済発展でマイカーが増え、交通渋滞は社会問題になっています。このときは渋滞がひどくて時間がかかりました。距離的には甲南大学から三宮くらいで、日本なら3140円です（タクシー料金検索サイトによる）。

○なおメーターが14元でも15元請求されますが、チップを要求してはなりません。最近導入された燃料費（基本料金を超えると一律1元加算）です。中国のタクシーは料金設定が安いので、買い物時にも便利に使われている、庶民の生活に寄り添うような存在です。またそれゆえ通勤通学の時間帯などにはなかなかつかまらなくて困ることもあります。



○スーパーマーケットのチラシを見てみましょう(前頁図版参照)。龙骨=龍骨です(「骨」の字の日中の字体の違いに注意)。中国には龍がいて、中国人は龍を食べるのでしょうか。なぜ500gあたりの値段を表記しているのでしょうか……龍骨はいいスープがとれる豚の背骨の部分です。そして中国の重さの単位に斤jinがあり、1斤はおよそ500g、中国人が生活の中で体得している重さなのです。果物・野菜・肉やお菓子なども量り売りで、1斤あたりの値段が書いてあります。我々には500mlペットボトルの重さが目安になるでしょう。有機=有機、有機りんごの値段は右の富士りんごの2倍以上していますが、中国人の食の安全に対する意識の高まりがみられます。

○外で餃子を食べるときも材料の小麦粉の分量で注文します。餃子は一般的にゆでて水餃子として食べ、主食としておかずと共に食べます。1斤の10分の1が1両liǎng(約50グラム)で、水餃子6個分ぐらいなので、2両(100g)が1人分の注文の目安でしょう。日本では食中毒に対する憂慮から、残った料理の持ち帰りを断わるところもありますが、中国ではどこでも「打包 dǎbāo!」(包んで下さい)の一言で、持ち帰り用容器に入れてくれます。

○環境保護についての教育・啓発も盛んに行われています。買い物袋持参、資源再利用など、部分的には中国の方が進んでいる面もあります。自身の属する文化そして異文化それぞれにそれぞれのよさがあり異文化を通して自文化を客観的にとらえることもできます。学生の皆さん、ぜひ若い時に中国へ行って中国の人々の熱き思いに触れ、異文化の壁にぶつかって下さい。ことばと文化の壁を乗り越えることの面白さを知り、その楽しさを享受する人生を選んでほしいのです。自分の活動範囲を、自分の母語が通用する範囲に限定してしまうのはつまらないことです。日中間では過去の歴史のことがよく問題になりますが、過去の戦争の歴史から殺しあうことの愚かさを学ばず、偏狭なナショナリズムに固執することを続け、各自が好き勝手なことをしていたら、国境を越えた人間の文明全体が破綻してしまうことは明白です。中国という異文化との接触を通して、異なる文化を持つ人々が地球規模で連帯する、あるべき未来をそれぞれ具体的に思い描いてほしいと願っています。

(研究のため滞在している北京にて/円換算は大体の目安です)



ベネッセこどもちゃれんじのしまじろうの中国展開「巧虎Qiaohu」シリーズのDVD。「しまじろう」は、多くの皆さんが子供の頃からよく知っているキャラクターですね。「巧虎」は日本オリジナル版の中国語吹き替えではなく、中国の文化に合わせた独自の構成。将来は日中の若者をつなぐ共通の話題になるかもしれません。

日常生活にみる韓国人の礼儀作法

—食事作法を中心に—

国際言語文化センター准教授 金 泰 虎

一般的に人間は異文化に接した時、日頃、自分が営む生活、価値観、行動様式とその形態が異なると、敬遠したり、反対に好奇心をもったりと両極端の反応を見せます。つまり裏を返せば、その文化が自分を取り巻く環境とほぼ同じであれば、同一のものとして見なし、あまり興味を示さないし、記憶に留めることもほとんどないわけです。

これらの反応は、日本の人々が韓国の人々やその文化に接したときにも起こると言えます。様々な場面において、韓国の文化と日本の文化の違う点に気付いて、親近感をもって韓国のパターンを受け入れれば、礼儀正しい人になります。逆に、相違点を無視して敬遠し、日本流を押し通せば、場合によっては行儀の悪い、マナーのない、可笑しい人と見なされるでしょう。国境を越えて人々の移動が激しいグローバル化時代の今、日本の人が韓国へ行き、韓国人と出会って食事を共にする機会も多くなっています。そこで、様々な礼儀作法の中でも食事をめぐる作法を取りあげるのが役立つのではないかと思い、以下では日韓交流において、日本人が違和感を感じる韓国人の食事作法を中心に紹介していくことにします。

韓国では、未だに社会に儒教的な価値観が根強く残っており、食事をする時も年齢による順番があります。これは儒教の教えにある五倫の中の1つ「長幼有序」、つまり何をするにも年長者を年少者より優先する「長幼の序」が守られているのです。年長者と一緒に食卓についたとき、まず年長者が食具（箸や匙）を手にとって食べ始めることで、全員が食事をスタートします。この食卓には少し畏まった雰囲気が漂うため、年長者は年少者に配慮し、食べたらずぐ席を外すという光景も度々見られます。

ところで、家父長は自宅で食事をするとき、妻が作った料理に対して「いただきます (잘 먹겠습니다)」(食べる前)、「ごちそうさまでした (잘 먹었습니다)」(食べた後)という言葉は口にしないのが一般的です。逆に、子供たちは料理を作った母に対して、これらの言葉をいいます。

一方、人と一緒に外食をする場合、相手に対し食べる前に「いただきます」と言うと、「ごちそうになります、私は食事代を払いません」という意味になります。ちなみに、韓国では一般的に、レストランで店主やシェフに「ごちそうさま」、「ごちそうさまでした」とは言わないです。

しかし、他の家庭に招待された時や、外食をするにしても、人にご馳走になることが決まっている場合などは、主催者に「いただきます」や、「ごちそうさまでした」と言わなければ、失礼になるということも知っておく必要があると思います。日本とは「いただきます」、「ごちそうさまでした」を使う場面が少し違うところに注意する必要があります。

そして、韓国の飲食文化の中では、「割り勘」をする習慣があまりないので、「割り勘」に相当する単語はありません。一般的に飲食代は、地位の高い人、年上の人、お金に余裕があるリッチな人が支払うという雰囲気があります。ところで、日本のように会社帰りに、居酒屋で一人でお酒を飲むというのは、韓国ではほとんど見受けられません。飲み屋での一人酒は、振られたり、悩みのある人がする行為だというのが韓国での一般的な印象です。ところで、お酒を飲むとき、気を遣う年長者、例えば祖父・父・勤務先の上司などの前では、真正面ではなく、向きを替えて顔をそらして飲みます。また、年長者からお酒を注いでもらっても、即座に飲むのではなく、遠慮しつつ、少しずつ口にするなど、勢いよく飲みません。また、年少者は年長者からお酒を注いでもらう際も、年長者に注ぐ際も、片手ではなく、両手で行います。

特に、韓国では「술은 어른 앞에서 배워라 [スルン オルン アペソ ベウオラ]」という言葉があります。直訳は「酒は大人の前で学べ」となります。この言葉が表す意味は、前に言及したように、年長者に気遣いを表す飲み方、つまり「これから酒を飲む年齢になる人は、年長者の前で気を遣いつつ、礼儀を学びながら飲みなさい」という教えなのです。この背景には、若者に酒を飲む際の礼儀を身につけさせて、酒癖の悪い行動を事前に防ぐとともに、酒の力を借りて社会の秩序を乱すのを戒める狙いがあるものと考えられます。

ところで、韓国では茶碗やお椀は手にとって食べず、食卓においたまま食べます。日本でのように、手にとって食べると、「行儀が悪い」と見なされます。茶碗やお椀を手にとらずに食べるのは、匙を使うからです（『日韓の食事作法—作法の相違とその作法形成の原因を中心に—』（『日韓食文化の比較研究』叢書103、甲南大学総合研究所）を参照されたい）。ちなみに、韓国では匙と箸を併用しますが、主に使うのは匙です。そのため、「○○국 (グック)」（汁）・「○○湯」・「○○찌개 (チゲ)」（鍋）など汁気の食べ物が発達しています。一方、汁気のない食べ物は箸で食べますが、いずれも直箸や直匙が基本です。最近、韓国でも一部の食堂では、日本のように取り箸や取り皿を提供してくれますが、これはグローバル化時代の影響だと思われます。

そして、日本では麺類を食べるとき、「ズルズル」と音を立てることに、場合によっては美味しいという意味合いが込められますが、韓国ではマナーが良くないことと見なされます。なお、韓国の食事では食べきれないほどたくさんのおかずを並べますが、これは「食べ残す文化」による習慣と言えます。例えば、韓国の食堂に行くと、食べきれないほどのおかずが出された後で、メインメニューが出されますが、これは残すのを前提に提供しているのです。日本では食べ残さないのが礼儀と言えますが、韓国では全部平らげると、もてなしの食べ物が足りなかったという意味に捉えるのです。

このように、韓国人の食事に関する礼儀を理解した上で、食文化に接すれば、より面白くて楽しい体験ができると思います。

異文化に魅せられて

国際言語文化センター日本語特任講師 富 阪 容 子

ある休日に、のんびりとカフェでハーブ茶を飲んでいたら隣のテーブルで話している若い女性の声が入ってきました。

「日本って国では、ただ日本語しか使っていないくて、小さくて狭い島国に過ぎないよね。でも、英語を使えば自分の世界がどんなに広がることか。こんなにうれしいことはない」

と生き生きと語っていたのでした。英語を使って自分の視野や世界を広げることに私も大賛成です。この女性もやりがいのある仕事に挑戦しながら世界中を飛び回っているのかもしれませんが、しかし、日本は本当にそんなにちっぽけでつまらない国でしょうか。国際化が進んで国境を超えて往来することが多くなった昨今においても、日本はやっぱり島国のままでとどまっているのでしょうか。日本は閉鎖的で魅力のない国でしょうか。そう考えると、日本文化や日本語を学びたくて甲南大学に留学してくる学生たちの存在が私たちを勇気づけてくれます。彼らは日本が大好きで日本に魅力を感じているからこそ、来日してくるのです。日本のマンガやアニメに興味を持っている学生たちもいるし、日

本の武道をやりたい人もいます。同世代の学生たちと触れ合う機会を持つことを何よりも楽しみにしています。私たちは日本の良さにもっと目を向けてもいいのではないのでしょうか。

毎年、9月になると、40人余りの留学生たちが来日します。甲南大学ではアメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリアなどに加えてフランスやドイツからの留学生を迎えています。彼らは日本での生活や学習が成功に導かれるように、それぞれの大学で事前にオリエンテーションを受けてきているので

う。その上、過去に甲南大学へ留学した先輩たちからアドバイスをもらってきている人も多くなっています。しかしながら、いくら多くの有益な情報を事前に得ていても、実際に自分が行ってみなければ、本当のところはわからないのではないのでしょうか。一人一人の異文化体験は異なったものとなるでしょうから、これさえわかれば大丈夫というような特効薬はないのです。

大半の留学生たちはホストファミリーと共に生活しますから、その生活を通して日本の生活スタイルに親しんでいきます。日本の家庭の一員として受け入れてもらえて初めて、留學生活のすべてが順調に始まるわけです。「ホストファミリーの母は日本の母です」と断言する学生もいれば、「門限が10時なんて早すぎる」と漏らす女子学生もいます。「私はホストファミリーと良い人間関係を保っていると信じていたのに、疎外感を感じさせられた」と大きなショックを受ける学生もいます。ホームステイの生活こそが異文化体験の基盤であり、中心なのです。彼らは「日本人は親切です」と言いますが、一方では「電車に乗っていると、いつのまにか自分の周りから人がいなくなってしまう」とも言います。いかなる困難にぶつかってもそれを乗り越える方法を発見してもらいたいものです。留學経験によって彼らは人間的にも大きく成長していくことでしょう。

このようなYear In Japan Programばかりではなく、夏期にも6週間だけの「夏期日本語集中講座」が開講されています。その期間には「日本語体験学習」プログラムが実施されています。教室外で実際に日本語を使ってみるチャンスを利用して会話能力を伸ばそうとするプログラムです。国際交流委員会International Exchange Committeeのメンバーを初めとする甲南大学生の協力を得て、「キャンパスインタビュー」や「クラブ訪問」「書道体験」「茶道体験」などを実行していますが、いつも大好評です。恥ずかしがらずに外国語を使ってコミュニケーションをはかってみることで自信がつくようです。人と人との交流によってやりがいを感じるのでしょう。夏期日本語集中講座の参加学生たちもやはり同世代の甲南大学生との触れ合いの機会を何よりも心待ちにしています。

甲南大学の学生さん!! キャンパス内で留学生を見かけることがあれば、ぜひ積極的に話しかけてみてください。英語もよし、日本語もよし。きっと笑顔で応えてくれるでしょう。それがきっかけと



なって、お互いに本音で語り合えるような信頼関係を築くことができれば、双方にとって得られるものが大きいと思います。どんな言語を使ってもかまいません。相手を理解しようという意欲がありさえすれば、自分の視野や世界を広げることが可能だと信じています。日本語を学ぶために留學してきた学生たちに対しては日本語を用いて情報交換してみるのもいいでしょう。日本に憧れて留學してきた学生たちがいつまでもその眼の輝きを失わずにいてほしいと願っています。

外国語科目・日本語科目優秀制度のお知らせ

国際言語文化センターでは、「外国語科目」「日本語科目」に優秀な成績を修めた学生（留学生）に対して、『優秀賞』を授与しています。

優秀賞を目指して「外国語科目」の学習をがんばって下さい。外国語科目の基準等については以下のとおりです。（「日本語科目」については、別に定めています。）

選考対象者： 本大学に3年間以上在学し、3年次終了までに次の単位をすべて修得している者。

中級英語	2科目（8単位）以上
上級英語	1科目（4単位）以上
中級の第2又は第3外国語	2科目（8単位）以上
上級の第2又は第3外国語	1科目（4単位）以上

海外語学講座Ⅰは英語の中級科目として、海外語学講座Ⅱは第2又は第3外国語の中級科目として取り扱う。

選考対象科目： 3年次終了までに修得したすべての外国語科目（基礎外国語科目を除く。）を対象とする。

選考基準： 秀を7点、優を5点、良を3点、可を1点とし（ただし、2006年度以前の入学生が、選考対象者に含まれる場合は、秀を5点とする。）、3年次終了までに修得したすべての外国語科目（基礎外国語科目を除く。）の合計点により、上位30名を表彰する。なお、どの言語を第2外国語として履修したかは考慮しない。

優秀賞制度

選考者の発表： 選考された者に対する表彰は6月に行なう予定である。

学習指導室を利用しませんか

国際言語文化センターでは、学生の皆さんの「外国語」学習の手助けをするために、「外国語学習相談アワー」を開設しているほか、6号館5階【英語学習指導室651】、【ドイツ語・フランス語学習指導室652】、【中国語・韓国語学習指導室653】を外国語学習のために利用することができます。海外語学講座や長期留学、その他言語学習のためのグループワークや情報交換などに、落ち着いて学習できるスペースを利用してください。（利用できない時間帯がありますので、利用するときは国際言語文化センター事務室へお問い合わせください。）

外国語学習 相談アワー	・開設曜日：英語（火・木）、ドイツ語（水）、フランス語（木）、中国語（月）、韓国語（水） ・開設時間：12：20～12：50（昼休み） ・相談担当者：国際言語文化センター専任教員
学習指導室 自由利用	・開室時間：月曜日～金曜日 午前9時～午後5時 ・設備内容：書籍、雑誌、など。（ただし、担当専任教員に相談の上利用できます。） ・利用方法：6号館3階国際言語文化センター事務室へ利用申込みをしてください。（要学生証）
開設場所	・6号館5階 各言語学習指導室
開設の期間	・後期は2010年9月18日（土）～2010年12月24日（金）、 2011年1月6日（木）～2011年1月14日（金）

みんな集まれ！外国語で話してみよう

チューターと自由な会話を楽しんでみませんか！きっとコミュニケーション能力がアップしますよ。

国際言語文化センターでは、各言語（英・独・仏・中国・韓国語）を母語とするチューター（留学生ならびに非常勤講師の先生方）にお願いして、6号館5階にある学習指導室で自由に学生の皆さんと会話のできる時間を設けています。大いに活用してください。チューターの時間割は、各学習指導室前に掲示しております。